

〔研究ノート〕

## 天上のキリスト教会

ナイジェリアにおけるアラドゥラ教会の一事例

落合 雄彦\*

### The Celestial Church of Christ —An *Aladura* Church in Nigeria—

Takehiko OCHIAI

The Celestial Church of Christ is an *aladura* church founded by Samuel B. J. Oshoffa in 1947 at Port Novo, French West Africa. The Celestial Church rapidly expanded after Oshoffa moved the base of his ministry to Lagos, British Nigeria, in the early 1950s. *Aladura* means a “person who prays” in Yoruba, and *aladura* churches are a “Christianity Made-in-Yorubaland,” whose common features are possession, prophesy, speaking in tongues, faith healing, and exorcism. Although other *aladura* churches are in a state of stagnation or decline, the Celestial Church expanded within and without Nigeria throughout the late 1990s. Today the Celestial Church has 1,864 parishes in Nigeria and 329 parishes abroad. The aim of this article is to examine the Celestial Church’s historical development, doctrines, organizational structures, rituals, and gender.

---

\* おちあい・たけひこ：敬愛大学国際学部専任講師 アフリカ地域研究  
Lecturer of African Studies, Faculty of International Studies, Keiai University.

## はじめに

天上のキリスト教会 (The Celestial Church of Christ: 以下セレ・チャーチと略す)<sup>(1)</sup> は、1947年にサミュエル・ビレウ・ジョセフ・オショファ (Samuel Biléwu Joseph Oshoffa) という人物が仏領西アフリカのポルトノボにおいて創始したアラドゥラ教会である。

アラドゥラ (*aladura*) は「祈りの人」を意味する Yoruba 語であり、アラドゥラ教会とは、主に現在のベナン南部からナイジェリア南西部にかけての地域に居住する Yoruba 人の社会のなかで、1920年代以降に形成されたキリスト教の一潮流である。欧米ミッション系教会から分離して形成されたアラドゥラ教会は、熱狂的な祈禱、憑依、異言 (聖霊に満たされて、本人には未知な言語や意味不明な言葉を話す現象)、悪霊祓い、信仰治療などを共通の特徴としている。アラドゥラ教会は、当初 Yoruba 人の土着的キリスト教運動として始まったが、やがて非 Yoruba 人の信者も獲得するようになり、次第に西アフリカ各地へと教勢を拡大していった。今日、アラドゥラ教会のなかには、西アフリカ諸国ばかりか、主にナイジェリア人移民コミュニティを拠点として欧米諸国にまで支部教会を擁する教団もみられる。そうしたアラドゥラ教会の代表的教団としては、25年にナイジェリアのアビオドン・アキンソウォン (Abiodun Akinsowon) という少女とモーゼズ・オリモラデ (Moses Orimolade) というアングリカン教会の伝道師によって創設されたケルビム・アンド・セラフィム (Cherubim and Seraphim) や、同年にアングリカン教会のナイジェリア人公会問答師であるジョサイア・オルノウォ・オシテル (Josiah Olunowo Oshitelu) によって創始された主の教会 (アラドゥラ) (The Church of the Lord [Aladura]) などが挙げられる<sup>(2)</sup>。

ところで、1920年代中葉に創始されたケルビム・アンド・セラフィムや主の教会 (アラドゥラ) は、ナイジェリア独立後の60年代に教勢を急速に拡大させたが、70年代以降は欧米のキリスト教の影響を受けたペンテコステ＝カリスマ運動が台頭するなかで次第に成長が鈍化し、今日では、その教会成長はほぼ横ばいかむしろ衰退傾向にあると考えられている<sup>(3)</sup>。これ

に対して、ケルビム・アンド・セラフィムや主の教会（アラドゥラ）よりも20年程遅れて創設され、ようやく50年代に入って仏領西アフリカから英領ナイジェリアに移植されたセレ・チャーチは、70年代以降ナイジェリアで急速な成長を遂げるにいたった。90年代後半に入っても、セレ・チャーチはナイジェリアのヨルバ社会を中心に比較的堅調な教勢拡大を続けている。

本稿の目的は、多くのアラドゥラ教会が教勢の停滞傾向を示すなかで、いまま堅調な教会成長を遂げているセレ・チャーチをナイジェリアにおけるアラドゥラ教会の一事例として概観することにある。

## 1. 創始者の生い立ちからセレ・チャーチの創設へ

セレ・チャーチの創始者であるオショファは、1909年にポルトノボで生まれた。大工職人であった父親は複数の妻をもち、多くの子供をもうけたが、生まれた子供はすべて女子であり、かつ1人を除いてすべての娘が若くして他界していた。そこで、メソジスト教会の熱心なメンバーであった父親は、家督を継ぐ男子を与えて下さるように神に対して祈り、その願いがかなえられた場合には、息子を神への奉仕のために捧げると誓う。かくして授かったのが、オショファであった。父親は、神との約束を守るために、オショファを7歳と13歳のときにそれぞれメソジスト教会の聖職者のもとに預け、キリスト教教育をほどこしてもらおうとした。しかし、結局2回ともうまくいかず、オショファを聖職者に育てることを諦めた父親は息子に大工仕事を教えた。オショファは27歳まで大工をして生計を立てたが、父の死後は材木商人に転向し、森で黒檀などを入手してはそれを町で大工たちに販売することを生業とするようになった<sup>(4)</sup>。

そうしたなか、1947年5月23日、オショファは、いつものとおり木材を入手するために船漕ぎ人夫を雇い、小船に乗って森に入った。その日、ポルトノボ周辺では日食現象がみられたという。オショファは正規の学校教育を受けたことはなかったが、メソジスト教会の聖職者のもとにいたわずかな期間に基本的な文字の読み書きを学び、少なくとも聖書は読むことが

できるようになっていた。彼は、常に聖書を携帯し、工作中であってもしばしば祈禱の時をもった。日食現象が観測されたその日も、オショファは森の中で仕事のかたわら聖書を読み、祈っていた。すると、どこからともなく声が聞こえてきて、オショファは眼を開けることができなくなった。その声はこう語ったという、「ルリ (LULI)。これはイエス・キリストの栄光を意味する」。オショファがようやく眼を開けてみると、そこにはコウモリのような羽をつけた2本の手をもち、上あごと下あごにそれぞれ2本ずつの歯をもつ白い猿がいた。また、クジャクのように色とりどりの尾を広げる鳥がいた。さらに、体を巻き、コブラのような口をした短い蛇がいた。やがて、これら3つの動物はそれぞれ森や空に姿を消したが、オショファはこの出来事を契機に自分のなかに大きな変化が起きたと感ずるようになった<sup>(5)</sup>。

オショファが小船にもどってみると、船漕ぎ人夫が腹痛で苦しんでいた。人夫に事情を聞くと、人夫はオショファがいない間に彼のスープを密かに飲んでしまったのだと告白する。そこで、オショファは人夫を戒めたうえで、彼の腹部に手を置き、その腹痛を癒してやった。ところが、腹痛から解放された人夫は、オショファに感謝するどころか、不思議な霊力をもつオショファを恐れて彼のもとから逃げてしまう。こうして森の中に小船とともに残されたオショファは、その後約3カ月間にわたって森の中を1人でさまようことになる。彼は、蜂蜜を食べ、川の水を飲んで生き長らえた。また、この間、彼は多くの幻をみて、そして熱心に祈ったという。この森での不可思議な体験後、日常生活にもどったオショファは死者を復活させるなどの様々な奇蹟を行い、人々の注目を集めるようになった<sup>(6)</sup>。

1947年9月29日、ポルトノボの自宅で数人の友人たちとともに祈っていたオショファに対して、神の啓示が天使を通じて下る。その啓示とは、次のようなものであった。

神は、世界宣教のためにあなたを遣わそうと望んでおられる。多くのキリスト教徒は、その生涯の間、この世の問題や困難に直面すると

き、呪術師や他の暗黒の力を求め、そこからすべての種類の助けをえようとする。死のとき、彼らはキリスト教徒であると思っても、彼らはもはやキリスト教徒ではない。というのも、悪魔が彼らに刻印を押したからである。この結果、そうした人々は死後にキリストをみることができない。神は、宣教と熱心な勧めの使命のためにあなたを世界に遣わすことを欲しておられる。しかし、世界はあなたを信じないであろう。人々があなたに聞き従うようにし、あなたの業を助けるために、聖なる神癒の奇蹟の業がイエス・キリストの名においてあなたにもたらされよう。こうした神癒の業とあなたへの神の霊的なしるしこそが、神があなたを遣わされた事実の証しとなる<sup>(7)</sup>。

この啓示を受けたオショファは、やがて独自の教会であるセレ・チャーチを創設した。毎年セレ・チャーチでは、神からの啓示がオショファに下った9月29日を教会創設記念日として祝っている。

さて、セレ・チャーチ創設後、オショファはポルトノボを中心として次第に信者を獲得していったが、その一方で、カトリック教会のようなミッション系教会やケルビム・アンド・セラフィムのような他のアラドゥラ教会から様々な批判や中傷を受けるようになった。そこで、1951年、オショファは、信者からの熱心な勧めもあってセレ・チャーチの活動拠点をポルトノボからナイジェリアのラゴスに移転することを決意する。ラゴスのマココ地区には、すでに前年にセレ・チャーチのメンバーであった数名の漁師によって活動拠点が築かれていた。ラゴスに移住したオショファは、以後このマココ地区を中心に奇蹟的な癒しの業を伴った積極的な宣教活動を展開するようになる。

ナイジェリアにおける後発のアラドゥラ教会であるセレ・チャーチは、1960年代にはまだあまり教勢を拡大できなかった。しかし、ナイジェリアが原油価格の高騰に伴うめざましい経済成長を経験した70年代に急成長を遂げる。特に、ポルトノボ時代のセレ・チャーチは、比較的教育水準の低い農民、漁師、行商人などが信者の主要な階層であったが、ラゴスに活動

拠点を移してからセレ・チャーチは、軍人、企業家、弁護士、教員、公務員といった都市部の中間層あるいはエリート層をも取り込むことに成功し、急速に教勢を拡大した<sup>(8)</sup>。

## 2. 教 勢

セレ・チャーチの信者数に関する正確な統計資料はない。そこで、本稿では、セレ・チャーチが信者向けに毎年発行している小冊子<sup>(9)</sup>をもとに、セレ・チャーチ教区 (parish) の数と1990年代後半におけるその推移を考察してみたい。

表1は、ナイジェリア国内におけるセレ・チャーチ教区数を州別に示したものである。同表によれば、セレ・チャーチは1999年時点でナイジェリアの27州とアブジャ連邦首都に合計1,864教区を有している。しかし、州

表1 ナイジェリアにおけるセレ・チャーチの州別教区数

州 名	1995年	1999年	増加率(%)	州 名	1995年	1999年	増加率(%)
ラゴス	676	844	25	クワラ	48	38	▲21
ナイジャー	20	24	20	アビア	10	10	0
バウチ	3	4	33	アクワイボム	22	22	0
アブジャ連邦首都	13	15	15	コギ	15	16	7
オグン	243	278	14	プラトー	10	10	0
オンド	226	233	3	カドゥナ	17	17	0
オヨ	106	109	3	ベヌエ	4	4	0
オシュン	66	66	0	カノ	4	4	0
エド	71	74	4	カッチーナ	2	2	0
デルタ	47	47	0	ソコト	2	2	0
アナンブラ/エヌグ	10	10	0	ケビ	1	1	0
クロスリバー	4	4	0	アダマワ	5	5	0
イモ	15	15	0	ボルノ	3	3	0
リバーズ	6	7	16	合 計	1,649	1,864	13

(注) ナイジェリアでは、1996年に連邦制度が改正され、それまでアブジャ連邦首都と30州から構成されていた連邦が連邦首都と36州という構成へと移行した。しかし、本表作成のために参考にした下記のセレ・チャーチ発行資料では、州名あるいは区分は99年発行資料においても96年以前のものが用いられている。また、旧30州のうち、ジガワ、ヨベ、トラバの3州については記載がなく、おそらくセレ・チャーチの教区が存在していないことを意味するものと思われる。

(出典) The Celestial Church of Christ, *Bible Lessons and Parishes*, Lagos: International Headquarters of the Celestial Church of Christ, 1995 and 1999をもとに筆者作成。

表2 海外におけるセレ・チャーチの国別教区数

国 名	1995年	1999年	増加率(%)	国 名	1995年	1999年	増加率(%)
イギリス	26	42	62	カメルーン	7	7	0
カナダ	2	2	0	ガーナ	15	—	—
オーストリア	3	4	33	ニジェール	2	2	0
イタリア	—	6	—	シエラレオネ	1	1	0
ドイツ	4	10	150	トーゴ	12	12	0
フランス	7	15	114	ザイール(現DRC)	1	1	0
アメリカ	26	49	89	コートジボアール	140	136	▲3
小 計	68	128	88	ブルキナファソ	1	1	0
				ガボン	1	23	2,200
				セネガル	1	1	0
				ベナン	17	17	0
				小 計	198	201	2
				合 計	266	329	24

(出典) The Celestial Church of Christ, *Bible Lessons and Parishes*, Lagos: International Headquarters of the Celestial Church of Christ, 1995 and 1999をもとに筆者作成.

別にみると、ラゴス州が844教区（ナイジェリア全体の45.3%）、次いでオグン州が278教区（14.9%）、オンド州が233教区（12.5%）、オヨ州が109教区（5.8%）の順となっている。これらの諸州はいずれもヨルバ人が多く居住するナイジェリア南西部に位置しており、セレ・チャーチがヨルバ人地域以外に拡大してはいるものの、依然としてヨルバ人中心の教団であることを示唆している。また、95年と99年の教区数を比較してみると、ナイジェリア全体におけるセレ・チャーチ教区数は4年間で215教区増え、13%の増加率を示している。これを州別にみると、ナイジェリア南東部や北部の諸州では教区数にほとんど変化がみられなかったのに対して、ラゴス州では168教区（増加率25%）、オグン州では35教区（14%）が新たに設置されている。このように、ナイジェリア国内のセレ・チャーチは、90年代後半においてもヨルバ人居住地域を中心に依然として堅調な成長を遂げていることがわかる。

表2は、海外におけるセレ・チャーチ教区数を国別に示したものである。セレ・チャーチは、1999年時点でナイジェリア国外に329教区を有しており、そのうち欧米諸国に128教区（海外における教区全体の38.9%）、中部・

西アフリカ諸国に201教区（同61.1％）を置いている。欧米諸国のなかでは、大規模なナイジェリア人移民コミュニティが存在するアメリカに49教区（欧米諸国全体の38.3％）、イギリスに42教区（同32.8％）がそれぞれ置かれている。他方、アフリカ地域に関しては、セレ・チャーチ教区の設置は西アフリカ諸国と一部の中部アフリカ諸国に限定されており、なかでもコートジボアールにアフリカ全体の67.7％に相当する136教区が集中している。また、95年と99年の教区数を比較してみると、海外におけるセレ・チャーチ教区数はこの4年間に全体で63教区増え、24％の増加をみせている。これを地域別にみると、欧米諸国では4年間に新たに60教区が開設され、88％という急速な成長傾向をみせた。特に、アメリカやイギリスにおいて堅調な教勢拡大が生じている。これに対して、中部・西アフリカ諸国では教区数の伸びはほぼ横ばい状態にある。海外における最大のセレ・チャーチ教区数を有するコートジボアールでは衰退傾向さえみられる。このように、90年代後半における海外でのセレ・チャーチ活動は、アフリカ諸国において停滞傾向がみられる一方で、欧米諸国において活発な展開がみられると言える。

ところで、セレ・チャーチ発祥の地であるベナンのポルトノボには、現在もその最高本部（Supreme Headquarters）が置かれている。しかし、ナイジェリアを拠点とする現在のセレ・チャーチにとって、その存在はあまり重要なものではない。また、表2によれば、ベナンには1999年時点で17のセレ・チャーチ教区しか設置されておらず、セレ・チャーチが同国でほとんど教勢を拡大していないことがわかる。このように、今日のセレ・チャーチにおいては、ベナンの最高本部が比較的軽視され、また同国においては必ずしも積極的な宣教活動が展開されていないなど、その位置づけが極めて低いものとなっている。

この理由としては、オショファが1950年代初頭にポルトノボからラゴスに移住して以来、セレ・チャーチがラゴスのマココ地区にナイジェリアの管区本部（Diocesan Headquarters）を、また同市ケツ地区に国際本部（International Headquarters）をそれぞれ置き、それらを拠点にナイジェリア

内外の宣教活動を展開してきたこと、オショファが85年に交通事故で死去したのち、セレ・チャーチ内部で後継者をめぐる対立が生じ、その際、ポルトノボの最高本部寄りの立場にたつJ. K. オウオドゥニ (J. K. Owodunni) が破れ、最高本部とは距離を置くアレクサンダー・アビオドゥン・バダ (Alexander Abiodun Bada) が最高指導者に就任したこと等が挙げられよう。筆者がセレ・チャーチ信者に行ったインタビューによると、後継者人事に破れて主流派のセレ・チャーチを離脱したオウオドゥニ派は、現在もポルトノボの最高本部と協力関係をもちながら、セレ・チャーチの名称のもとで独自の活動を展開している可能性があるという。こうした教団内部の権力闘争と確執が、ナイジェリア中心に発展してきた今日のセレ・チャーチにおける「ベナン冷遇」の一因となっている。

### 3. 教義と実践

セレ・チャーチの教義と実践には、他のアラドゥラ教会と共通する点が多い。

アラドゥラ教会とヨルバの伝統宗教との親和性を考察したベンジャミン・レイ (Benjamin C. Ray) は、アラドゥラ教会の創始者たちが、ヨルバの伝統宗教にみられる異教的要素の多くを否定しながらも、不可視の諸霊と儀礼行為の有効性という2つの要素への信仰をヨルバ文化から継承したと指摘している<sup>(10)</sup>。すなわち、西洋的キリスト教が神と聖霊を除く霊的存在への信仰を否定してきたのに対して、アラドゥラ教会はヨルバの伝統宗教にみられる多様な霊的存在を認め、そうした霊的存在、特に悪霊が人間世界には充満しているとみなしてきた。そして、アラドゥラ教会は、こうした邪悪で危険な世界を生きていくために、まず人間が聖水、聖油、香、ロウソク等を用いた儀礼を行うことで自ら悪霊を祓うとともに、アラドゥラ教会の特徴とも言える熱心な祈禱によって、神、イエス・キリスト、聖霊、天使などの霊的な力を引き出し、悪霊と対決する必要があると説くのである。

こうしたアラドゥラ教会共通の信仰体系の上に展開されるセレ・チャー

チの教義においては、悪霊に満ちたこの世は人間にとって危険な空間であり、逆にセレ・チャーチの礼拝堂とその敷地内は神や聖霊によって守られた安全な空間と考えられている。セレ・チャーチの礼拝堂やその敷地は聖なる空間であるため、そこに入る者は、信者あるいは未信者を問わず靴を脱いで裸足になることが求められる。また、礼拝堂では、礼拝や集会が開催されるたびに、ロウソクに火を灯したり、香を焚いたり、聖水をまいたりして聖なる空間から悪霊を祓う行為が営まれる。さらに、教会の敷地に入ろうとするセレ・チャーチのメンバーは、通常着ている衣服（セレ・チャーチでは「肉の服」と呼ぶ）を脱ぎ、カトリックの聖職者が着用する服を模したスタナ（ヨルバ語で *sutana*、英語では *soutane*）と呼ばれる白い長衣（「霊の服」）を着ることが義務づけられている。

このように聖なる空間とされる教会の敷地は、セレ・チャーチのメンバーにとって、悪霊がうごめく邪悪な世界のなかに存する、まさに霊的オアシスであり、ある意味で地上の天国と言える。天上のキリスト教会という名称は、同教会が地上における唯一の聖なる天上世界であることを象徴的に示している。病気や家庭内の不和に苦しむ信者は、聖霊や天使によって守護された天上空間としての教会へとしばしば逃避し、そこでときには数日間にわたって寝泊りをして、外界の邪悪な霊から自分の身を守ろうとする。また、教会は地上において最も神聖かつ最も神に近い場であるがゆえに、そこでは外界よりも癒しの奇蹟が起きやすく、また神からの啓示も頻繁に下されることになるという<sup>(11)</sup>。

セレ・チャーチの各礼拝堂には、主の教会（アラドゥラ）と同様に、堀に囲まれた「恵みの地」（Mercy Land）と呼ばれる一区画が隣接して設けられている。通常、「恵みの地」には海岸の砂が敷かれ、信者はそこで祈禱したり、静思のときをもったり、断食を行ったりする。また、「恵みの地」には井戸や水場が作られていることが多く、その水は聖水として信者が身体に塗布したり、飲取するために用いられる。こうした聖水には、悪霊祓いや癒しの効能があるとされる。一説によれば、この「恵みの地」は、イエス・キリストが40日間さまよい、悪魔の誘惑に勝利した荒野を模した

ものであると言われている<sup>(12)</sup>。しかし、西アフリカ沿岸部のヨルバ社会で生まれたセレ・チャーチは、もともと海岸と密接な関係をもっていたと考えられる。セレ・チャーチの教義のなかに、オショファが海の水位を下げて海岸部の侵蝕を食い止めたり、イエス・キリストがラゴスのヴィクトリア島のバー・ビーチに出現したといった、海岸を舞台とする複数の奇蹟記事がみられるのは、その証左であろう<sup>(13)</sup>。すなわち、おそらくセレ・チャーチの各礼拝堂に付設されている「恵みの地」とは、新約聖書時代のイスラエルの荒野ではなく、オショファが生きた西アフリカ海岸部の模倣なのである。

西洋的キリスト教とセレ・チャーチの教義上の顕著な相違点の1つは、イエス・キリストの神学的位置づけにある。一般に、西洋的キリスト教神学では、イエスは人類全体の罪の贖いのために神より地上へと遣わされた救い主とみなされている。これに対して、セレ・チャーチでは、たしかにイエスは神のひとり子、唯一の主、人類の救世主とされてはいるが、その最も重要な役割は、人間が悪霊と対決するうえでの最良の助け主として機能することにある。セレ・チャーチにおいては、イエスを救い主として受け入れることは少なくとも信仰告白として重要な意味をもつが、実際の信仰生活においては、救世主イエスの贖いによる罪からの救済よりも、助け主イエスの加護による悪霊からの解放のほうがより重要である。セレ・チャーチにおけるイエスは、神、聖霊、天使などと同様に、信者の熱心な祈禱に応えて妖術といった諸悪霊と戦い、あるいはそれらに勝利するための力を人間に与えてくれる霊的存在として位置づけられている。

セレ・チャーチの教義にはヨルバ伝統宗教の影響が色濃く反映されているが、その信仰実践においては、カトリック教会やイスラームといった様々な外来の宗教運動の影響を随所に見出すことができる。例えば、セレ・チャーチでは、礼拝堂の入口付近に水の入った小さな金属製のボウルを備えつけ、信者がそのボウルの水に指を浸し、その指で自分の前面において十字の形を切る習慣がみられる。おそらくこれは、セレ・チャーチがカトリック教会で行われていた同種の習慣を模したものであろう。このほか、セレ・チャー

チではイエスの母マリアへの信仰が重視されているが、これもカトリック教会の影響と思われる。また、かねてよりアラドゥラ教会とイスラームには類似点が多いとの指摘がなされてきたが<sup>(14)</sup>、セレ・チャーチでは、アルコールを飲んではならない、豚肉を食してはならない、教会の敷地内において靴を着用してはならない、礼拝堂内において男女が並んで着席してはならない、生理中の女性が教会の敷地内に入ってはならないといった様々な禁忌があり<sup>(15)</sup>、そうした戒律はイスラームの習慣と共通する点が多い。さらに、額を床面にあてて行う礼拝の姿勢や断食の習慣などもおそらくイスラームの影響であろう。セレ・チャーチがムスリムによる信仰実践の影響を強く受けた背景には、開祖オショファの親類の多くがムスリムであり、彼が幼少期からムスリムの習慣に慣れ親しんでいたことが関係しているかもしれない。

セレ・チャーチにおける組織上の最大の特徴は、Pastor-Founder であるオショファを象徴的な頂点とする複雑かつ細分化された階級制度にある。セレ・チャーチでは、信仰告白をしてバプテスマを受けた新入会者はまず単に Brother あるいは Sister と呼ばれるようになる。そして、やがて彼らは、セレ・チャーチの階級制度における最下位の Elder というランクへと進み、その後次第に各人の霊的な成長にしたがって、Elder with cape, Full Elder, Assistant Leader, Leader, Wo-Leader, Senior Leader, Superior Senior Leader, Assistant Evangelist, Full Evangelist, Evangelist, Superior Senior Evangelist, Supreme Evangelist といった諸ランクの階梯を昇進していく<sup>(16)</sup>。こうした階級昇進をめぐる人事権は、オショファの後継者である最高指導者バダが最終的に掌握している。階級昇進は、年1回クリスマスの時期に、バダがナイジェリアのオグン州にあるイメコという町で行う任命式において正式に認められる。

#### 4. 儀 礼

セレ・チャーチは儀礼を極めて重視する教団である。セレ・チャーチの定期的儀礼には、大きく分けて週間儀礼、月間儀礼、年間儀礼の3種類が

ある。

週間儀礼としては、日曜日に行われる聖書研究と礼拝、水曜日の祈禱会と礼拝、そして金曜日にもたれる妊産婦のための祈禱会と礼拝がある。

月間儀礼としては、毎月第1木曜日の深夜に新月礼拝と呼ばれる集会もたれる。新月礼拝では、信者が水の入ったボトル1本と白いロウソク1本をそれぞれ持参して夜10時に教会に集まり、約2時間にわたって讃美、祈禱、ダンスなどを繰り返す。その後、信者が持参したロウソクが集められ、礼拝堂の主祭壇、男性信者の水ボトル、女性信者の水ボトル、「恵みの地」の祭壇などの周りにそれぞれ7本ずつのロウソクが供えられて、火が灯される。その上で、零時を合図に罪の許しと聖化を求める礼拝が行われる<sup>(17)</sup>。

セレ・チャーチは、ペンテコステやイースターといった一般的な教会行事に加えて、いくつかの独特な年間儀礼を行う。前述した9月29日の教会創設記念日のほかに、例えば、毎年7月の第1金曜日は聖マリアの日とされ、1977年7月15日にオショファがトランス状態のなかで処女マリアの幻を見たという出来事を記念する行事が営まれる。また、6月第1日曜日には青年のための収穫感謝祭が全教区一斉に行われ、8月第1日曜日にはマココ地区にあるナイジェリア管区本部、10月第1日曜日にはポルトノボの最高本部において成人のための収穫感謝祭がそれぞれ開催される。そして、およそ8月から11月までの時期を通じて、セレ・チャーチの各教区はそれぞれの収穫感謝祭を独自に営む。一般にハーベストと呼ばれているこの祭りは、様々な恩寵や祈禱の成就などを神に感謝するための行事であり、礼拝堂は色とりどりの風船やテープで装飾されて華やいだ雰囲気包まれる。こうした諸行事のほか、オショファ存命中は、毎年クリスマス前日に信者が教会誕生の地ポルトノボの浜辺に集まり、礼拝を捧げるという習慣がみられた。しかし、オショファは、ナイジェリアで死亡した場合は母の生地であるイメコに、ベナンで死亡した場合にはポルトノボに遺体を埋葬し、その地を聖地として巡礼するようにとの遺言をのこしており<sup>(18)</sup>、この遺言にもとづいて、85年に彼の遺体がイメコに埋葬されると、ナイジェリア

南部の小さな町イメコがセレ・チャーチの聖地とされ、クリスマスには多くの信者が巡礼するようになった。いまでもベナン人など一部の信者は、クリスマス時期にはポルトノボの海岸に集まり、礼拝を持ち続けているが、ナイジェリア人の大半の信者はもはやポルトノボには行かず、イメコでのクリスマス集会や任命式に出席している。

こうした年間儀礼のうち、聖マリアの日、収穫感謝祭、クリスマス集会の3つは、セレ・チャーチにおける秘蹟（サクラメント）に位置づけられている。それ以外の秘蹟としては、バプテスマ、聖餐式、洗足式、マココのナイジェリア管区本部でのイースター集会がある<sup>(19)</sup>。

また、これら集団儀礼のほかに、セレ・チャーチの信者は、個人的な信仰実践として、熱心な祈禱、断食、悪霊祓いなどを行っている。

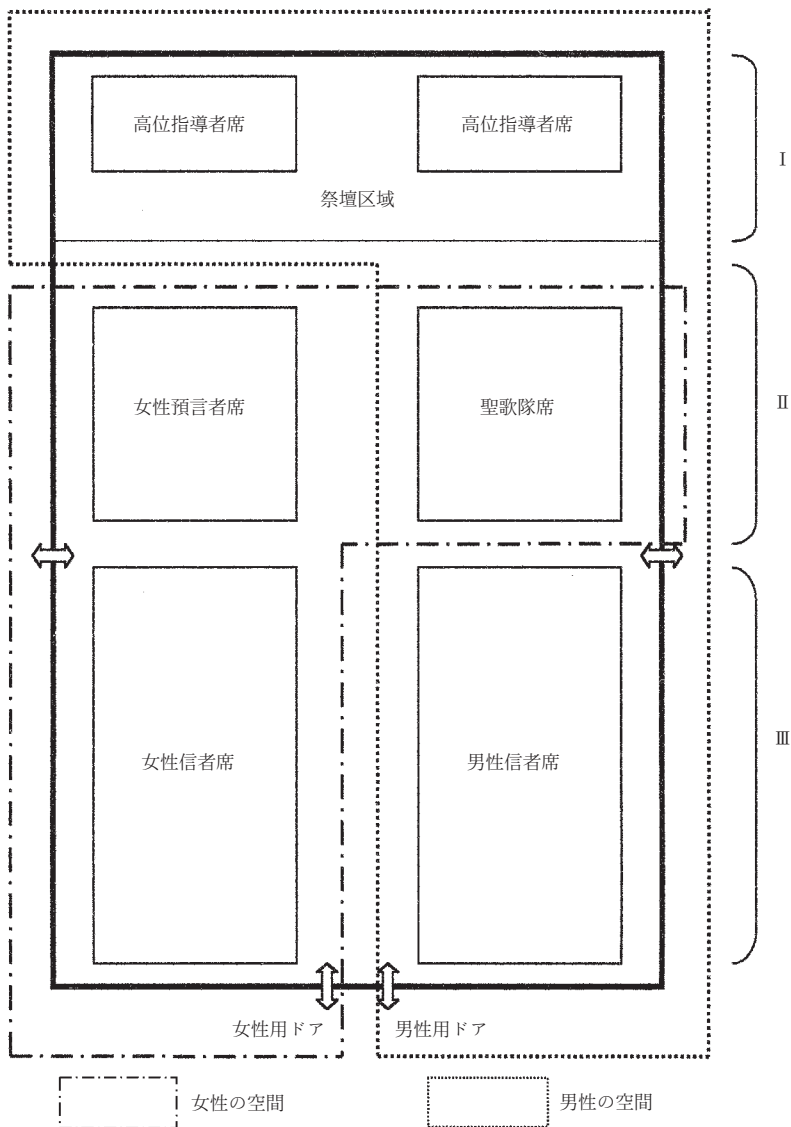
## 5. ジェンダー

セレ・チャーチにおいては、ジェンダーが重要な意味をもつ。

例えば、セレ・チャーチでは、女性信者は一定レベル以上の階級に昇進することができない。また、女性信者には、説教をしたり、聖書を会衆の前で朗読したりする権威が認められていない。そればかりか、前述したとおり、生理中の女性は不浄な存在とみなされ、教会の敷地内に入ることさえ許されていないのである。このように、セレ・チャーチにはジェンダーによる明確な境界が存在しており、指導権が男性によって独占されている。

こうしたセレ・チャーチのジェンダー的側面は、礼拝堂における男女別の席配置にも色濃く反映されている。図1は、セレ・チャーチの礼拝堂におけるジェンダー空間を示したものである。同教団の礼拝堂における男女別の空間は、それぞれLの字を上下逆転させたような鉤型をしている。集会がもたれる際、男性信者はまず正面祭壇に向かって右側後方のドアより入る。そして、一般信者の場合には一番後方（Ⅲの層）にある男性信者席、聖歌隊メンバーの場合は中間位置（Ⅱの層）にある聖歌隊席、高位指導者の場合は祭壇区域（Ⅰの層）の席にそれぞれ着く。これに対して、女性信者は向かって左側後方のドアより入り、一般信者の場合は後方（Ⅲの層）

図1 セレ・チャーチの礼拝堂におけるジェンダー空間



(出典) 筆者作成.

の女性信者席、預言者の場合は中間（Ⅱの層）の女性預言者席、そして、聖歌隊メンバーの場合は同じく中間（Ⅱの層）の聖歌隊席に着く。女性信者は、礼拝堂最前部の祭壇区域に着席するどころか、同区域内に立ち入ることさえ許されていない。このように、セレ・チャーチの礼拝堂は、男女で混成される聖歌隊の領域を例外とすれば、ジェンダーによって空間が明確に区分されているのである。

しかし、セレ・チャーチ礼拝堂のジェンダー別空間を示した図1はまた、女性信者が礼拝において2つの重要な役割を果たしていることをも示唆している。それは、預言と讃美である<sup>(20)</sup>。たしかに、礼拝堂最前部のⅠ層は男性の高位指導者によって独占されているが、それに次いで祭壇に近いⅡ層には預言者席と聖歌隊席が置かれ、そこでは男性信者よりもむしろ女性信者が中心的かつ積極的役割を果たす。セレ・チャーチの礼拝は、Ⅰ層の男性高位指導者と、女性が積極的な役割を果たすⅡ層の預言者並びに聖歌隊を中心として営まれ、それに最後部のⅢ層の男女一般信者が従う形態となっている。たしかにセレ・チャーチの女性信者は、礼拝において説教をしたり、聖書を朗読することはできない。しかし、その代わりに、女性信者の一部は、一般信者よりも祭壇に近い領域で神からの啓示を預言したり、神を讃美する役割を主体的に演じ、それによって礼拝の運営に積極的に貢献している。その意味で、セレ・チャーチの礼拝は男女協同の営為と言えよう。

## むすびに代えて——アラドゥラ教会研究覚え書

ナイジェリアのアラドゥラ教会に関する研究は、1960年代以降、アフリカ独立教会研究の一環として主に欧米のアフリカ研究者によって積極的に試みられた。しかし、アラドゥラ教会の成長の鈍化とアフリカでのペンテコステ＝カリスマ運動の隆盛のなかで、次第にアラドゥラ教会は欧米諸国の研究者の間において注目されなくなっていった。そして、それに代わって、ナイジェリア人研究者がアラドゥラ教会の研究を継承・発展させるようになり、今日にいたっている。他方、わが国においては、エイドリアン・

ヘイスティングズ (Adrian Hastings) の著作 (邦題『アフリカのキリスト教——ひとつの解釈の試み』)<sup>(21)</sup> などを通じて、ナイジェリアにおけるアラドゥラ教会の概要がわずかながら紹介されてはきたものの、日本人によるアラドゥラ教会の本格的な研究成果はいまだ皆無に等しい。

そもそも筆者は、アフリカ政治研究の一学徒にすぎない。ヨルバ語も解さないし、宗教運動を考察するための知的トレーニングも一切受けたことはない。その意味で、筆者のアラドゥラ教会研究は、まさに素人のそれであり、本稿も含めて極めて表層的な内容であることを免れえない。しかし、筆者は、ナイジェリアを訪問する度に、可能な限り週末には各地のセレ・チャーチを訪れ、同教会の活動を観察し続けてきた。ラゴス市マココにあるナイジェリア管区本部や同市ケツにある国際本部も訪問し、集会に参加したり、信者にインタビューを行ってきた。また、セレ・チャーチの聖地イメコにも足を運んだ。イメコでは、現在セレ・チャーチによって建設中の新たなカテドラルを見学した。建設中のカテドラルはかなり大規模なもので、筆者が訪問した1998年9月には、まだ建物の基礎とわずかな外壁部分しか出来上がっておらず、その完成にはさらに気が遠くなるほどの歳月が必要のように思われた。しかし、実際にその建設現場に立ったとき、セレ・チャーチというアラドゥラ教会の、いまだ絶えざる確かな脈動のようなものを感じたことを記憶している。

本稿は、セレ・チャーチに関するかなり概説的な研究ノートにすぎない。しかし、それが、わが国におけるアラドゥラ教会研究の1本の嚆矢となれば幸いである。

(注)

- (1) 天上のキリスト教会の名称は、フランス語では *Eglise du Christianisme Céleste*、ヨルバ語では *Ijo Mimo Ti Kristi Lati Orun Wa* (*The Holy Church of Christ from Heaven Above*) である。
- (2) ケルビム・アンド・セラフィムの詳細については、J. D. Y. Peel, *Aladura: A Religious Movement among the Yoruba*, London: Oxford University Press, 1968, 主の教会 (アラドゥラ) については、H. W. Turner, *History of an African Independent Church*, Vol. I: *The Church of the Lord (Aladura)* and Vol. II: *The Life and Faith of the Church of the Lord (Aladura)*, London: Oxford University Press, 1967をそれぞれ参照されたい。

- (3) アラドゥラ教会の教勢に関する精確な統計資料はないものの、主の教会（アラドゥラ）の創始者の息子であり、現在イバダン大学宗教学部の講師を務めるギデオ・アダバンデレ・オンテル（Gideon Adebadele Oshitelu）は、1999年7月に筆者が同氏の研究室で行ったインタビューのなかで、同教団の成長は現在ほぼ横ばい状態にあると語っている。
- (4) A. A. Agbaje, “Rev. S. B. J. Oshoffa (1909–1985),” in Joseph Akinyele Omoyajowo, ed., *Makers of the Church in Nigeria*, Lagos: CSS Bookshops, 1995, pp. 171–173.
- (5) The Celestial Church of Christ (Nigeria Diocese), *Constitution*, Lagos: The Board of Trustees for the Pastor-in-Council, 1980, p. 5.
- (6) *Ibid.*, pp. 5–7.
- (7) *Ibid.*, p. 7.
- (8) Rosalind I. J. Hackett, “Thirty Years of Growth and Change in A West African Independent Church: A Sociological Perspective,” in Rosalind I. J. Hackett, ed., *New Religious Movements in Nigeria*, African Studies Volume 5, Lewiston and Queenston: The Edwin Mellen Press, 1987, pp. 162–163.
- (9) The Celestial Church of Christ, *Bible Lessons and Parishes*, Lagos: International Headquarters of the Celestial Church of Christ, 1995 and 1999.
- (10) Benjamin C. Ray, “Aladura Christianity: A Yoruba Religion,” *Journal of Religion in Africa*, Vol. XXIII, No. 3, 1993, p. 268.
- (11) *Ibid.*, pp. 274–276.
- (12) *Ibid.*, pp. 277–278.
- (13) The Celestial Church of Christ, *Constitution*, pp. 12–13, pp. 21–22.
- (14) Humphrey J. Fisher, “Independency and Islam: the Nigerian Aladuras and Some Muslim Comparisons,” *Journal of African History*, Vol. 11, No. 2, 1970, pp. 269–277.
- (15) そのほかの禁忌としては、以下のようなものがある。いかなる偶像崇拝や黒呪術にも参加してはならない。タバコを吸ってはならない。制服を除いて、黒や赤の色の服を着用してはならない。スタナを着用しているときは靴を履いてはならない。教会内では白以外の色のロウソクを用いてはならない。遺体を教会内に搬入してはならない（The Celestial Church of Christ, *Constitution*, pp. 29–30; The Celestial Church of Christ, *Order of Service*, Lagos: International Headquarters of the Celestial Church of Christ, 1991, p. 145）。また、セレ・チャーチの信者は、ヨルバ社会のなかで悪霊がしばしば利用すると伝統的に信じられてきたコーラの実などはなるべく食さないように奨励されているという（Jacob Kehinde Olupona, “The Celestial Church of Christ in Ondo: A Phenomenological Perspective,” in Rosalind I. J. Hackett, ed., *New Religious Movements in Nigeria*, African Studies Volume 5, Lewiston and Queenston: The Edwin Mellen Press, 1987, p. 61）。
- (16) *Ibid.*, pp. 53–54.
- (17) The Celestial Church of Christ, *Order of Service*, pp. 51–53.
- (18) The Celestial Church of Christ, *Constitution*, p. 3.
- (19) *Ibid.*, pp. 31–33.
- (20) Olupona, “The Celestial Church of Christ in Ondo,” pp. 62–63.
- (21) エイドリアン・ヘイスティングズ（斎藤忠利訳）『アフリカのキリスト教——ひとつの解釈の試み』、教文館、1988年（Adrian Hastings, *African Christianity: An Essay in Interpretation*, Geoffrey Chapman, 1976）。

（参考文献）

落合雄彦「ナイジェリアの新宗教——十字架と星の同胞団」『アフリカレポート』第22号、1996年3月、20–24ページ。

中林伸浩「アフリカの宗教とキリスト教」『アフリカ研究』第38号、1991年3月、115-131ページ。

デイビッド・B. バレット監修『世界キリスト教百科事典』、教文館、1986年 (David B. Barrett, ed., *World Christian Encyclopedia*, Oxford University Press, 1982)。

エイドリアン・ヘイスティングズ (斎藤忠利訳)『アフリカのキリスト教——ひとつの解釈の試み』、教文館、1988年 (Adrian Hastings, *African Christianity: An Essay in Interpretation*, Geoffrey Chapman, 1976)。

A. A. Agbaje, “Rev. S. B. J. Oshoffa (1909–1985),” in Joseph Akinyele Omoyajowo, ed., *Makers of the Church in Nigeria*, Lagos: CSS Bookshops, 1995, pp. 169–193.

Deji Ayegboyin and S. Ademola Ishola, *African Indigenous Churches: An Historical Perspective*, Lagos: Greater Heights Publications, 1997.

The Celestial Church of Christ (Nigeria Diocese), *Constitution*, Lagos: The Board of Trustees for the Pastor-in-Council, 1980.

The Celestial Church of Christ, *Order of Service*, Lagos: International Headquarters of the Celestial Church of Christ, 1991.

The Celestial Church of Christ, *Bible Lessons and Parishes*, Lagos: International Headquarters of the Celestial Church of Christ, 1995.

The Celestial Church of Christ, *Bible Lessons and Parishes*, Lagos: International Headquarters of the Celestial Church of Christ, 1999.

Peter B. Clarke, *West Africa and Christianity*, London: Edward Arnold, 1986.

Humphrey J. Fisher, “Independency and Islam: the Nigerian Aladuras and Some Muslim Comparisons,” *Journal of African History*, Vol. 11, No. 2, 1970, pp. 269–277.

Rosalind I. J. Hackett, “Thirty Years of Growth and Change in A West African Independent Church: A Sociological Perspective,” in Rosalind I. J. Hackett, ed., *New Religious Movements in Nigeria*, African Studies Volume 5, Lewiston and Queenston: The Edwin Mellen Press, 1987, pp. 161–177.

Friday M. Mbon, “The Social Impact of Nigeria’s New Religious Movements,” in James A. Beckford, ed., *New Religious Movements and Rapid Social Change*, Paris: UNESCO, London, Newbury and New Delhi: Sage Publications, 1986, pp. 177–196.

Friday M. Mbon, “The Quest for Identity in African New Religious Movements,” in Gudrun Ludwar-Ene, ed., *New Religious Movements and Society in Nigeria*, Bayreuth African Studies Series 17, Bayreuth: Eckhard Breitingner, 1991, pp. 7–29.

Jacob Kehinde Olupona, “The Celestial Church of Christ in Ondo: A Phenomenological Perspective,” in Rosalind I. J. Hackett, ed., *New Religious Movements in Nigeria*, African Studies Volume 5, Lewiston and Queenston: The Edwin Mellen Press, 1987, pp. 45–73.

Akin Omoyajowo, “The Aladura Churches in Nigeria since Independence,” in E. Fasholé-Luke, R. Gray, A. Hastings and G. Tasie, eds., *Christianity in Independent Africa*, Bloomington and London: Indiana University Press, 1978, pp. 96–110.

J. D. Y. Peel, *Aladura: A Religious Movement among the Yoruba*, London: Oxford University

Press, 1968.

J. D. Y. Peel, "The Christianization of African society: some possible models," in E. Fasholé-Luke, R. Gray, A. Hastings and G. Tasie, eds., *Christianity in Independent Africa*, Bloomington and London: Indiana University Press, 1978, pp. 443–454.

Benjamin C. Ray, "Aladura Christianity: A Yoruba Religion," *Journal of Religion in Africa*, Vol. XXIII, No. 3, 1993, pp. 266–291.

H. W. Turner, *History of an African Independent Church*, Vol. I : The Church of the Lord (Aladura) and Vol. II : The Life and Faith of the Church of the Lord (Aladura), London: Oxford University Press, 1967.